

病と異形に関する文化研究—他者としての自然の表象

環境人間学部 環境人間学科

○教授 石倉 和佳

キーワード

伝染病（感染症）、太平洋諸島、ハワイ、ジェームズ・クック、イギリス海軍、航海記

研究概要

本研究は、病とそれがもたらす大量死がどのように語られていったかを考察するために、18世紀後半から19世紀半ばにかけてのハワイ諸島についての記述を事例として考察したものである。1778年、イギリス海軍の調査船でハワイ諸島にヨーロッパ人として初めて上陸したのはジェームズ・クック船長である。この時以来、ハワイの人口は下降の一途をたどり、クック来訪時は40万人とも考えられた諸島全体の人口は、1820年頃には15万人ほどに激減していた。それ以後はヨーロッパの宣教師が定住するようになり、ハワイは捕鯨船の重要な寄港地となり、急速にその姿を変えていく。ハワイの人々の大量死をもたらしたもっとも重要なものと考えられるのは伝染病（梅毒、コレラ、腺ペスト、赤痢、風疹などの感染症）である。

本研究では、ヨーロッパ人の来布とともにもたらされた種々の病による大量死が起こった時期に出版された、イギリス海軍関係者や宣教師などが残したハワイ諸島についての記述を分析した。伝染病が現地の人々の健康と命に多大な影響を与えるだろうことは、クック船団の主要な人々に共有されていた理解であり、1779年のハワイへの二度目の訪問の際には実際の性病患者を確認している。しかしこうした事実は多くの人々が認識するところとはならず、クックの航海記は縮約版や子供向けに編集されたものなど様々な版が出版されるロングセラーとなり、それと並行してその後のハワイの情報が旅行記や航海記などの様々な出版物を通して紹介されていった。この時代、ハワイの出来事が活字になり読み物になるということは、英語圏において文明を享受していると考えられた人々の読書の楽しみや関心に供するということでもあった。ハワイ諸島では種々の伝染病が拡大するたびに人口が減少したが、現地の人々の大量死についての問題意識は、イギリス海軍のみならず、宣教師たちの視点が導入されるにしたがって、現地の人々のモラルの問題や部族間の戦いの残酷さへと語りの焦点が変化するのが観察できる。ハワイの奇怪な神々の像や性的な放逸さが紹介されるにつれ、死をもたらす病は現地の人々の道徳的な罪の帰結として示唆され、死の意味の本質を語ることはなくなっていくのである。このように、19世紀前半のハワイについての英語による言説には、病のもたらす死を語らず他の表象で置き換える語りの構造がしばしば現れることが確認できた。

本事例は太平洋諸島での歴史的記述を対象としたものであるが、こうした語りへの批判的読解は現代の事例においても応用可能であり探求される必要がある。また、病の科学的解明が進むことと、病による死を語ることの間にあるギャップをいかに意識化するかについてもさらなる考察が必要だろう。

アピールポイント

人類の歴史において、感染症による大量死はしばしば起こっている。現代を生きる人々にとって、死がどのように語られているのかを考えることは、社会を新しい視点で見ることにつながるだろう。19世紀前半のイギリスでは、出版物の多様化と大量化が加速し、商業としての活字文化の隆盛が顕著となっていた。人々は「読みたいもの」を読んだともいえるのであって、「正しいもの」を選んで読んだかどうか分からない。こうした点は現代のインターネットの文字文化とも通底するところがあり、病についての語りについても検討しうる点だろう。